



東地中海地域ニュース

イスラエル：中東和平・オスロ合意 15周年に関するアッバース大統領発言 (9月12日付ハアレツ紙)

12日付ハアレツ紙は、オスロ合意15周年に当たって、アッバース大統領が同紙に対して行った中東和平プロセスに関する発言を報じている。概要以下のとおり。

1. 米国は、和平プロセスにおいて中心的な役割を果たしている。米国高官は本年末までに合意が達成されることを切望しており、それが可能であると考えているが、イスラエル・パレスチナ間には依然として大きな隔たりがある。
2. 5百万人の難民が全て帰還すれば、イスラエルは崩壊するであろうと理解しているが、イスラエルは難民問題における自らの責任と現実的な帰還権につき協議しなければならない。イスラエルに戻りたくないパレスチナ人はパレスチナに戻ることができる。イランを含む地域全てのイスラム教国はアラブ和平案を受け入れている。自分(アッバース大統領)は、イランの署名入りの文書をオルメルト首相に提示したが、同首相から返事はなかった。残念なことに、イスラエルの閣議においてこれまで何の議論も行われていない。
3. 自分は、仮の国境に国家を創設するというような暫定取決めには合意しない。如何なる合意もエルサレムや難民の帰還権という紛争の全ての要素を扱わなければならない。
4. (ファタハ・ハマス間の対話に関して)ファタハとハマスの挙国一致内閣のメンバーは皆、アラブ和平提案やロードマップ等、PLOによって署名されたあらゆる合意及びコミットメントを受け入れなければならない。我々はイスラエルに対して、(ハマス系議員を含む)全てのパレスチナ囚人の解放無しには如何なる和平合意もないと明確に述べた。
5. 我々は、二民族の為の二国家解決策を固持すべきであるが、西岸で継続している入植地建設、道路封鎖及び(イスラエルによる)作戦は、二国家解決策を遠ざけている。
6. 西岸とガザ地区を統合しない限り、パレスチナ国家は成り立たない。統合は、外交的手段によってのみ成されるべきである。第二次インティファダが武装闘争に変わった時、我々は過ちを犯した。自分は第三次武装インティファダを阻止するためには何でもやる。